

梅雨の合間に咲く花

み うら よし あき
三 浦 義 彰
Yoshiaki MIURA

I. はじめに

今年は季節の進み方が早めのようなのである。庭のバラの咲くのも例年は5月の連休の後にちらほら咲き出すのに、今年はなんと連休の初めにはもう見事な大輪が咲き揃っていた。それにつられて、ヤマボウシの可憐な白い花も、ハナミズキがまだ花をつけているのに、はやばやと咲き始めている。このヤマボウシはかねてご指導に与っていた東大の学長の故茅誠司先生といっしょに訪れた千葉の植木市で、先生を選んで買っていただいたものである。

茅先生が1988年に亡くなられ、もう今の若い人はお名前も知らない人が多いのではないかと2、3人に訊いてみたら、1人が「小さな親切」を小学校で習ったことがあると答えた。東大の卒業式に「身近の親切」の必要性を説かれた茅学長に学内の反響は必ずしもよくなかった。もっと高尚な理念を分かりにくい表現で話すのが東大の学長らしい告示であるというのである。ちょうどそのころ、東大で実験生



写真1 ヤマボウシの花

化学を専門とする私から実験室を取り上げる事件が学長の耳にも入り、まだ若い助教授に過ぎない私に茅学長自らいろいろな解決策を提示され、真剣に事後処置を講じてくださった。これは先生ご自身が示された「大きな親切」だったのである。

私はなぜ茅先生がヤマボウシをお好きだったのか、その理由は知らない。けれども遺伝研の木原均先生が先達になって、毎年梅雨の合間に「箱根樹木園山法師会」が開かれ、茅先生はこの会の常連だったという。『巨木、茅さん』という表題の単行本もあるように、ご自身のように大きな木がお好きだったのだろうか。



写真2 文字摺りの花

「文字摺り（もじずり）」とも呼ばれ、愛でられる草。ラン科なので、水分の多い太い根があります。植木鉢では、この根が乾き、枯れてしまうため、芝生の中が最適です。「激減しているラン科のなかで、この種だけは大丈夫」と、図鑑に書いてありました。そうであってほしいものです。

千葉大学名誉教授

〒113-0024 東京都文京区西片1-8-17 (1-8-17, Nishikata, Bunkyo-ku, Tokyo)



写真3 くつろいだ茅先生

Ⅱ. 茅先生とネジバナ

ネジバナはヤマボウシのような巨木に咲く花ではない。梅雨の合間に芝生に生えてくる20～30cmの茎にピンクの花がねじれたように咲くラン科の可憐な植物である。この花のことをお忙しい茅先生が暇をみつけては新聞に投書される。それは多くは花の話題であっても巨木の花ばかりではない。こんな可愛らしい花も先生の目を引いてそらさない。1974年の7月1日付の朝日新聞に載った投書「都心にしのぶもぢずりの花」もその1例である¹⁾。「今朝、車で東京・青山通りから議事堂前を走っていたとき、グリーンベルトの芝生の上を何気なくながめたら、高さ15cmぐらゐの茎がたくさん立っている。何だろうとよくながめたら、それは「もぢずり」のかれんな姿だった。百人一首にある「しのぶもぢずり」といっても知っている方は少ないと思うが「ねじりばな」といえば思い出される人も多いだろう。桃色の小さな花が頂上に向かって一列にねじれて並んでいる。」

これは都心にも「もぢずり」が咲いていますよ、という季節の便りで、朝刊でこの記事を読めばその日はほのほのとした気分になる、新聞のもたらす一服の清涼剤である。

茅先生は「もぢずり」の花がお好きで、1982年



写真4 中日友好協会
日本側：茅会長 中国側：寥承志会長*

*1926年暁星中学卒、早稲田大学を経て欧州の中国共産党入党、毛沢東、周恩来に次ぐ中国の要人、茅先生とは親友の間柄。

の6月2日付の東京新聞にも「モジズリ」という随筆を書かれている¹⁾。これはまだ茅先生が北大にお勤めのころ、物理学者の湯川秀樹先生や遺伝学者の小熊捍先生などと連れだつて、釧路のあたりを家族旅行をされたときのことである。原文は長いので要約すると、小熊先生が1本のかわいい草花を見つけきて、茅、湯川両先生に何の花か知っているかと訊かれたそうである。2人ともだまっていると、小熊先生が「これが百人一首にある『みちのくのしのぶもぢずりたれゆえに みだれそめにし われならなくに』のもぢずりだ」と教えてくれた。

京都に帰った湯川先生から小熊先生あてに1枚の色紙が送られ、次の歌が記されてあったという。「みちのくのしのぶもぢずり手折り来て われに教えし人遠きかも」

Ⅲ. 父の思い出の文字摺観音

私の父、東大内科の教授だった三浦謹之助は1950年に86歳で往診の途中、脳出血のため道路で倒れて亡くなったが、まだ記憶の確かなうち若いころのことを語った速記が残っている。その思い出の記のいちばん初めの部分を次に紹介してみよう²⁾。

「私は元治元年(1864年)に福島県の伊達郡高成田村という所で生まれました。福島町の町から2里ばかり隔たった所で、その間に阿武隈川という大きな川が流れております。川を渡って私の村まで行くには

山を一つ越さなければならぬ。その山まで行く途中に『文字摺観音』という観音様がありますが、その観音様は百人一首にあります河原左大臣の和歌、みちのくの しのぶもぢずり たれゆえに みだれそめにし われならぬに

というあの有名な歌を刻んだ碑がかたわらにあるところからきているのです。

そこに大きな池がありましてね。池の端に大きな石がありました。その石は石碑とは別なんです、その石の面を若い青い生麦でこすると死んだ人の顔がうつるといふ伝説があるのです。それで、昔、麦の育ちかけたのを人が来て取って、それでこするんで、百姓が困って、その大きな石を池の中に沈めてしまった。その石が今でも池の中にあるんです。」

Ⅳ. ネジバナかムギの葉か、どちらに軍配をあげるか

父は80歳を超えてからは涙もろくなって、この文字摺観音の話が出ると、涙ぐむのだった。しかし、この思い出を語ったときはまだ記憶は確かだったから、この観音様の話が全くの作り事とは思えない。茅先生のネジバナと父の生麦の葉との違い、死んだ人の顔と和歌に出てくる恋人らしい女性像とはまるで異なる。ネジバナが文字摺り花に擬されている理由もわからない。

文字摺観音は今では福島駅東口からバスで15分で行けるが、父のみたときとは大分ようすが変わって、もぢずり石(1×2m)は池の中ではなく、柵に囲まれている。この辺りでもう1つ目をひくのは芭蕉の句碑「早苗とる手もとやむかししのぶ摺」である。

日本国語大辞典(小学館)をみると「もぢずり」は「忍草の葉を布に摺りつけ、捻れ乱れた模様のあつる石に摺りこんで染めたもの。」とある。別に伝説



写真5 三浦謹之助 肖像 黒田清輝筆

としては麦の葉を石に摺りつけると恋人の姿が浮かぶ、という父の話に似た言い伝えもあるそうである。

さらに岩波の古典文学大系には、ここでいう忍草は現代慣用されているシダ類の植物ではなく、「垣衣」という石の上などに寄生する植物のことで「垣衣」と書いて「しのぶぐさ」と読むのだという。そうするとますますネジバナとは縁が遠くなるようであるが、ねじれた石の模様からの連想でネジバナが「もぢずり」になったのであろうか。

文 献

- 1) 茅 誠司先生遺稿, 追悼文集刊行会:「思い出の人, 茅 誠司」: 258-259, 1995.
- 2) 三浦謹之助先生生誕百年記念会準備委員会編:「三浦謹之助先生」: 2-3, 1954.